

リンボウ寸言「芸の町のDNA」

林 望

ある意味で、日本最高のテナーは藤原義江だ、と私は思う。あの自由自在に洒々落々たる歌い方のなかのイタリア的な楽天性と日本的な芸の味の面白さ。特に私は「鉦をおさめて」が大好きだが、この歌を藤原以上に歌える人は未だ出ない。田中絹代、二村定一、林伊佐緒、みなどこか共通した明るさと「芸の虫」的な気味を感じるけれど、それがどうしてなのか、誰にもわからない。が、下関の海と土と空が果たした役割は、きっと小さなものではないのであろうと、密かに私は思うのである。

083解説

本誌名は、下関市の市外局番に由来しています。しかし、下関市は3個の数字だけで示せるほどモノトーンな街ではありません。「うみ やま たいよう」とは、それを補足するリサイクルなのです。海あり山あり、そして太陽さんさんの下関には古来、其の花も豊かに咲いてきました。「うみ やま たいよう」をめぐるドラマの主人公はもちろん、読者の皆さんです。

083-231

「083」第3号

うみ やま たいよう

2009年7月31日発行

編集人＝堀田章

ディレクター＝大野金策

アート・ディレクター＝村上信信

表紙イラスト＝アジサカコウジ

デザイン＝城戸正代

編集委員＝林望

発行＝下関市

〒750-8521 山口県下関市南都町1番1号

☎083-231-2951 (総合政策部広報広聴課)

制作統括＝(株)電通九州

印刷＝凸版印刷(株)

協力＝下関市の皆さん

アドバイザー

下関フィルム・コミッション 常任委員長 宮永洋一

九州芸術学園山口校 代表 伊東文年

○バックナンバーを希望される方は、

下関市までお問い合わせください。

☎083-231-2951 (総合政策部広報広聴課)

○下関市ホームページからも電子ブックで「083」が読めます。

<http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/083/>

本誌記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。

次号予告 (2009年2月28日発行予定)

鉄道



冬の朝の山陽本線・
山門駅

編集後記

第3号は歌壇界のスーパースター、坂東玉三郎さんをお招きし、芸に対する熱い思いを語っていただきました。中国公演などの忙しい合間に快くお引き受けいただきありがたい限りです。今回の取材を通じて、関門海峡の潮流のように風々地域に息づく芸のDNAの存在を改めて発見することができました。我々も、これらを後世に引き継ぐべく、せめてmRNAの役割をしっかりと果たしてまいりたいと思います。(E)

今号から表紙絵を担当していただくアジサカコウジさんと下関の町を歩きました。茶山通りの商店街から住宅街へ、下って港沿いの町屋の路地に…その先で「おおっ」とアジサカさんは声をあげます。町が発する情感到呼応していたのでしょうか。ついに放った「こんなディープな場所を描いてもいいんですか?」という質問は、間違いない感嘆の声でした。その町を背景に、実在から空想を経て盛りだしたような、人物というより観念世界の生き物のような男が立っている、それが今号の表紙絵です。男が何者であるかに意味はないと知りつつ、考えるのは楽しい。答えは下関の町にひそんでいるのですから。(G)

テーマがテーマだけに、今回の取材では、下関市の文化活動の第一線でご活躍中の方々とお会いできました。人生の先輩の方ばかりですが、文化や芸術にそぞろ情熱には、ますます影響の勢いを感じました。同じ人と別な場所でも会うことも多く、「開っ子気分」急上昇中です。ところで、こんなに歴史ロマンあふれる街なのに、大ヒットしたご当地ソングがないような気がします。作詞の才能があればチャレンジするのにため息つきながら、ペンをマイクに持ち替えて、芸歌取材「夜郎のへ」へ入る。(F)

◇アンケート

「083」は今これを手に取られたあなたのための情報誌です。つねに深い眼差しを心がけて、皆さまの役に立つ情報を、ワンテーマ方式で下関市から発信してまいります。第3号についてのご感想、及び今後特集してほしいテーマやっておきのお知らせなどを、ぜひ込みハガキでお寄せください。アンケートに回答いただいた方の中から抽選で29ページで紹介した「たかせの互そ」のセットを10名様に、町田昌氏の著書「鉄道遺産」を2名様にプレゼントします。応募締切は平成20年10月31日消印有効。当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。